

NPO法人

全日本語りネットワーク

2013. 11. 23 発行

〒376-0045 群馬県桐生市末広町 11-1

JR 桐生駅構内 桐生市民活動推進センター

(Fax) 0277-47-4066 (振替) 00130 - 2 - 114808

(E-mail) welcome@japankatarinet.jp

(HP) <http://japankatarinet.jp/>

ニュース

語りの場を求めて、旅する語り部たち

三田村慶春（東京都国分寺市 絵本とおはなしの店おばあさんの知恵袋）

55年ほど前にテレビがお茶の間に入り始めるまで、子どもたちは薄い表紙の絵本雑誌『チャイルド・ブック』や『キンダー・ブック』に描かれたファンタジーの物語に遠い世界の夢を見、貸本屋で借りた伝記物語の主人公の活躍に心を躍らせ、また、時おり町を訪れる紙芝居屋の声調に聴き入ることで物語の世界へ旅をしたものです。陽が西に傾き始め、学校や外遊びから戻ると、ラジオから流れてくる「赤胴鈴之助」「紅孔雀」「笛吹童子」「一丁目一番地」「コタンの口笛」などのドラマが胸を湧き立たせてくれました。昭和30年代の子どもにとって新しい情報を得るには、いつも耳をそばだてていることが暮らしや遊びの中での自分の居場所を定めることに繋がり、現代のように情報機器やおもちゃが豊かでない時代には、それが最も大事な生活の知恵なのでした。年に一度、大きな真っ黒い三段重ねのこおりを背負って訪れる富山の薬売りのおじさんは、子どもたちには紙風船を土産に、応対する母には、時代の変わりゆく中での旅商いの困難さと世間に起こっているさまざまなよもやま話を残して、また旅を続けていくのでした。

私たち人類の歴史は、ホモ・サピエンスとしての歩みを始めたおよそ45万年前から、新天地を求めて戦いや民族の移動を繰り返して今に至っています。その歴史と共に、物語を伝える語り部もまた、民族から民族へ、国から国へと旅を続けてきました。彼らは、楽士、朗唱士、物売り、僧侶、作りもの職人として、我が国においては説教師、瞽女、旅商人など不安定な経済的理由から定住することを許されない者たちが担っていたのでした。彼らにとって、訪れた地で耳を敬てることで得た情報が、新たな物語を生み、次に訪れる地への土産話となったのでしょ

12年前から、私は東京・国分寺市に全国で唯一つの「語り」のための店として、「絵本とおはなしの店《おばあさんの知恵袋》」を開設し、「語り手」たちに向けた小さな「語りの場」を営んできました。20年近い語りの学びの中で得た、新しい人生の歩みと歓びを伝えたいとの思いと、地方から上京してくる語り手たちへの、ささやかな拠り所をつくりたいとの願いを叶えたものでした。ここでは国内の語り手はもちろんのこと、イギリス、フランス、ドイツ等の海外のストーリーテラーたちとの出会いをも重ね、語り手それぞれの魅力ある語りの数々を耳にできたことは財産となっています。

21世紀の子どもたちの生活はさまざまな情報媒体に囲まれ、どの情報を選択し、どのように扱えば良いか迷っているように見えます。学校においても「読書教育」に重点がおかれ、「聴き、語る」ことへの関心と取り組みは未成熟の状態です。これは我が国の歴史が常に、「お上」からの文字による「お触れ」「お達し」を優位としてきた意識形成に拠るところもあるのでしょうか。

耳をそばだてて、内なる声を養い、語る機会を豊かにすることが、子どもたちの、生き生きとした成長につながるものと信じています。

おばあさんの知恵袋の案内： [ブログ「国分寺 絵本」でクリック!](#) 電話：042-324-2708